

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立志貴野高等学校・教諭・中島正陽
- 2 研修期間 令和6年7月25日(木)～令和6年7月26日(金) 2日間
- 3 調査研究課題 教師と企業人との交流
- 4 研修機関等 富山経済同友会 インテック大山研修センター
- 5 研修の概要

7月25日から26日の2日間、インテック大山研修センターで開催された「教師と企業人との交流」研修に参加した。企業人と教員が集う研修で、講師による講話を聞き、参加者同士での意見交換を行った。

(1) 講演① 株式会社 MGG 代表取締役社長 牧田和樹氏

牧田氏は、株式会社牧田組の代表取締役社長に就任してからの自身の経験から、「人間力」についてお話しされた。牧田氏が社長に就任してまずしたことは、会社としての理念やビジョン、方針を決めることであったが、それだけでは会社をうまく動かすことができなかった。その経験から、人を動かすためには、説得するだけではなく、納得してもらう必要があるということに気が付いた牧田氏は、人に納得してもらうためには、「人間的や能力的に魅力のある人が、情緒的や論理的な対応をすることが必要である」とし、このことを「人間力」と呼んでいた。

「人間力」は「人間性・知性・意欲」の三本の柱から成り立つ。「人間性」は普段の生活の中で思いやりを習慣化することで育まれる。「知性」は知識と経験の掛け合わせであり、どちらかが欠けると身につかない。自分がやりたいこと、できること、やらなければならないことを実現する中でついた自信が「意欲」に繋がる。「人間力」を高めるためには、常に思いやりをもち、人間関係を構築することを継続しなくてはならない。また、自己効力感を育み、自身の存在意義を確立するために、学び続けることも必要である。牧田氏は、自身のもつ人脈と好奇心が、自分の幅を広げることに繋がったと話していた。

最後に、「人間力」は伝播する、と牧田氏は述べた。子どもが家族以外で初めて社会で接する大人は教師である。生徒の成長を支える立場として自分自身の「人間力」を高め続けることの必要性を強く感じた。

(2) 講演② YKK株式会社 副社長 黒部事業所長 小林聖子氏

YKK株式会社は、他人の利益と自らの繁栄を両立させる「善の循環」という考え方を掲げ、YKK精神としている。さらに、そのYKK精神を共有するために、社員一人ひとりが大切にし、実践する価値観として、「失敗しても成功せよ/信じて任せる」「品質にこだわり続ける」「一点の曇りなき信用」の3つの「コアバリュー」を定めている。YKK富山黒部事業所はこの精神から、持続可能で自然環境と共生する住まいづくりをするために「パッシブタウン」の開発を進めている。

小林氏は、YKK初の女性執行役員を務めている。YKKに入社したのは海外赴任に興味があったからだが、入社当時は一般職での入社であり、海外赴任への道は閉ざされていた。そこで、海外赴任ができないのであれば、「プロの秘書になる」と、偶々空席となっていた副社長秘書の仕事に全力で取り組んだ。その後、女性の活躍を推進する動きが活発になりだしたことで、アメリカへの赴任が叶った。海外への赴任の夢が叶ったあとは、北陸新幹線の開業や新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響もあり黒部での生活が増え、2024年に現在の副社長・黒部営業所社長に就任した。

これらの経験から、小林氏は「キャリア」とは人の生き方そのものであり、その80%は偶然の出来事に支配されていると考えている。ここまでのキャリアを積み上げてこられた理由として、小林氏は自分の意志に忠実だったこと、置かれた立場を受け入れたからこそその気づきがあったこと、運が良かったこと、順応性が高かったことを挙げていた。運はどこに転がっているかはわからない。そのため、運を逃さない準備をしておくことが大切であり、臨機応変に対応できることと何があっても自分は運がよかったと思えることが大事だと述べていた。

小林氏はこれまでのことは全て自分らしく生きるために行動してきたと語っていた。逆境の中でも自分が何をしたいかという意志を明確にもち続けるために、まず自分のことをよく知ることが必要ではないかと感じた。また、小林氏が置かれた立場で常に全力で取り組んでいた姿勢が強く印象

に残った。どんな状況にあっても自分の役割を全うし、その中でベストを尽くすことが、信頼を築く基盤になるということを学んだ。

(3) 講演③ 株式会社ユーグレナ 代表取締役社長 出雲充氏

出雲氏は、東京大学在学中に訪れたバングラデシュの現地の子どもたちが栄養不足で苦しんでいる姿を見たことがきっかけで、栄養失調を解決する方法としてミドリムシを使った食品の開発を始めた。しかし、ミドリムシの養殖には成功したものの、中々企業に採用されなかった。500社にリスクを理由に採用を断られ、ようやく採用されたが、出雲氏はこのままでは日本はチャレンジしない国になってしまうと感じたと述べていた。聞いたことがないからダメだ、と考えるのではなく、聞いたことがないからこそ面白いと考える社会にならないと考えたそう。

出雲氏が何度も強調しておられたのは、出雲氏自身が普通の核家族の出身であり、成功するために才能やお金の力は必ずしも必要ではない、ということである。試行回数と科学技術の掛け合わせこそが「ベンチャー魂」であり、何度失敗しても挑戦を繰り返せば成功に近づくことができる。そのために必要なのが「メンター」と「アンカー」だと語っていた。「メンター」は目標や心から尊敬する人であり、「アンカー」はその気持ちを思い出させてくれるものである。急速に変化する現代社会の中で、予測できない出来事も多いが、「メンター」の存在があることで、新しい挑戦にも自信を持って臨むことができ、「アンカー」があることで、自分自身の価値観や信念を忘れずにもち続けることができる。変化に対して柔軟でありながらも、自分を保つことができるようになるために、自分自身このような存在を大切にしつつ、生徒には様々なことに興味をもち、このような存在を見つけられるような感性を養うことが必要ではないかと感じた。

(4) アクティビティ研修

2日目に行われたアクティビティ研修では、いくつかの課題にグループで取り組み、その都度グループごとに振り返りを行った。解決することが難しい課題に対して、どのようにアプローチすれば解決できるのかを話し合う中で、異なる視点からの意見が出たことで、それまで考えもしなかった解決策が見えてきたこともあった。自分の名前や立場を伏せた状態で活動が行われたが、立場に関わらずお互いの考えを共有し続けることで考えが更に深まることを実感した。

また、午後からは「人が育まれるために必要な要素」について話し合った。私が所属していたグループでは夢や目標と経験、それを支える社会の存在が大切なのではないかという意見が多かったように思える。特に経験は成功だけでなく失敗からも学ぶことが重要だという意見が印象に残った。またそれを支える社会の存在も重要で、周囲の理解やサポートがあつてこそ、人は安心して成長できる環境が整うのだと感じた。

(5) 終わりに

2日間の研修で、講師の方々や富山経済同友会の方々から多くのお話を伺うことができた。教育現場以外の業界の知識や考え方、文化に触れることができ、視野を広げることに繋がったと思う。また、講演を聴く中で、教科の知識や授業の技術など学校での能力と同様に、自分の人間力を向上させることも必要だと強く感じた。今後も教育現場のものに限らず、多くのことに興味をもって学び続けたい。

また、今後は生徒が自分で考えたり悩んだりするような経験を多く積むことのできるように、生徒に任せられるようになりたいと思った。講師の方々や富山経済同友会の方々から伺ったお話の中に、社会の中では、自分のことをよく知ることや、間違ったり失敗したりしても挑戦し続けることが大切である、というお話が何度かあった。自分を見つめ直したり、失敗したりすることを恐れ、評価や効率を優先してしまうのは大人も子供も同じだが、学校は失敗できる場であり、安心して挑戦することのできる場だと感じてもらえるようにしたい。与えられてばかりでは自分の内面を見る機会が少なくなり、深く考えることがなくなってしまうと思う。自分自身、過度に介入してしまい、生徒の学びを奪うことになっていないか、自省する機会となった。適切な支援や指導をしつつ、生徒が自ら学びたいという気持ちを持ち、安心して挑戦し続けられるような関わり方を考え続けたい。

最後に、このような貴重な経験をさせてくださった富山県教育委員会の皆様、富山経済同友会の皆様に、深く感謝申し上げます。